

名大医学部学友時報 2019 8

目次	
1. 教授就任	1
2. 教授就任挨拶・インタビュー 林 良敬	2
3. 学友大会ご案内	3
4. 教授就任挨拶・インタビュー 島村 徹平	4
5. クラス会だより 珊瑚会	5
6. 学友会評議会開催	6
7. 准教授就任 今釜 史郎	7
	清水 忍
8. 浅川賞受賞にあたって 荒川 宜親	9
9. 人事トピックス 渡辺 宏久	10
10. 緑陰随想 加藤 岳人	11
	三島 信彦
11. 名古屋大学医学部学友会名古屋支部総会のお知らせ	12
12. 創基150周年基金を開始します	13
13. 『創基150周年によせて』御寄稿のお願い	15
14. 第28回基礎医学セミナー研究発表会表彰式	15
15. 基礎医学セミナー最優秀受賞者の言葉 箕浦 大朗	16
16. 編集後記	16

教授就任



環境医学研究所 生体適応防御研究部門
内分泌代謝分野 教授

はやし よしたか
林 良敬 先生



細胞情報統合解析部門
システム生物学分野 教授

しまむら てっぺい
島村 徹平 先生

内分泌代謝学 ^{はやし}林 ^{よしたか}良敬 先生 教授就任

〈略歴〉

1981年3月	東海高等学校 卒業
1987年3月	名古屋大学医学部医学科 卒業
1987年5月	名古屋第二赤十字病院 研修医
1989年4月	名古屋大学大学院医学研究科入学
1991年10月	同上休学
1991年11月	シカゴ大学医学部研究員
1995年4月	名古屋大学大学院医学研究科復学 日本学術振興会特別研究員
1995年8月	名古屋大学大学院医学研究科修了
2000年10月	科学技術振興機構・創造科学推進事業 (ERATO)・関口細胞外環境プロジェクト・ グループリーダー
2005年10月	名古屋大学環境医学研究所・分子細胞適応 研究部門・発生遺伝分野・助教授
2006年4月	名古屋大学環境医学研究所・生体適応防御 研究部門・発生遺伝分野・助教授
2007年10月	名古屋大学環境医学研究所・生体適応防御 研究部門・発生遺伝分野・准教授
2019年4月	名古屋大学環境医学研究所・生体適応防御 研究部門・内分泌代謝分野・教授

〈業績〉

1. Futaki S, Hayashi Y, Emoto T, Weber CN, Sekiguchi K. Sox7 Plays Crucial Roles in Parietal Endoderm Differentiation in F9 Embryonal Carcinoma Cells through Regulating Gata-4 and Gata-6 Expression. *Mol Cell Biol*. 2004; 24: 10492-503.
2. Hayashi Y, Yamamoto M, Mizoguchi H, Watanabe C, Ito R, et al. Mice deficient for glucagon gene-derived peptides display normoglycemia and hyperplasia of islet alpha-cells but not of intestinal L-cells. *Mol Endocrinol*. 2009; 23: 1990-1999.
3. Hayashi Y. Metabolic impact of glucagon deficiency. *Diabetes Obes Metab*. 2011; S1: 151-157.
4. Watanabe C, Seino Y, Miyahira H, Yamamoto M, Hayashi Y, et al. Remodeling of hepatic metabolism and hyperaminoacidemia in mice deficient in proglucagon-derived peptides. *Diabetes* 2012; 61: 74-84.
5. Hayashi Y, Seino Y. Regulation of amino acid metabolism and alpha-cell proliferation by glucagon. *J. Diabetes Investig*. 2018; 9: 464-472

学友会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、2019年4月1日付けで環境医学研究所、生体適応防御研究部門の教授を拝命いたしましたので、この場をお借りしてご挨拶申し上げます。

私は1987年に名古屋大学を卒業し、名古屋第二赤十字病院で臨床研修を受けた後、環境医学研究所内分泌・代謝

部門(松井信夫名誉教授・故妹尾久雄名誉教授)の大学院に進みました。大学院在学中の1991年にシカゴ大学医学部(Samuel Refetoff教授)に留学し、甲状腺ホルモン不応症(甲状腺ホルモン受容体遺伝子異常症)に関する研究を行いました。同大学のGreame Bell教授の研究室には清野進先生(神戸大学特命教授)をはじめとして多くの糖尿病研究者が日本から留学されており、その先生方との交流は現在も続いています。1995年に帰国した後は、甲状腺ホルモン受容体に関する研究に加えて、小児科の上條隆先生や小川正道先生とともに成長ホルモン単独欠損症の発症機構に関する研究を行いました。現在も細々ながら診断基準・治療指針の策定などを通して遺伝性内分泌疾患の解析には関わっています。2000年からは一転して、関口清俊先生(大阪大学寄付研究部門教授)のお誘いにより、科学技術振興機構・創造科学推進事業(ERATO)・関口細胞外環境プロジェクトに参加し、細胞外マトリックスの再生医学への応用を目指して、基底膜成分の産生制御機構・内胚葉系細胞の分化機構の解析を行いました。

このように内分泌学・生理学・分子生物学・遺伝学・細胞生物学・発生学と、多様な経験を積んだ後、2005年より環境医学研究所発生遺伝分野(村田善晴名誉教授)に助教授として着任いたしました。そこでは、内分泌系の臨床講座(糖尿病・内分泌内科、乳腺内分泌外科、産婦人科)の大学院生とさまざまな研究を行う一方で、自分の研究の軸となるプロジェクトをゼロから立ち上げることにしました。新規プロジェクトを立ち上げるのであれば、社会的影響の大きいコンディージュをターゲットとしたい、そして内分泌学のバックグラウンドとERATOでの経験を統合したものにしたいと考えた結果、グルカゴン遺伝子に注目しました。グルカゴンは1923年に発見された“古い”ホルモンですが、我々が作成した遺伝子改変動物モデルは世界で初めてのものとなり、それ以降、私はこの動物モデルの表現型解析を軸に研究を展開して今日に至っています。この過程では本学の糖尿病・内分泌内科、乳腺内分泌外科、産婦人科、保健体育センター所属の大学院生、さらには基礎医学セミナーの医学生に大いに貢献していただきました。現在は循環器内科の先生方や愛知医科大学・藤田医科大学など近隣の医大の先生方、さらに国内外の様々な大学の先生方との共同研究を進めています。

さて環境医学研究所には、長いあいだ内分泌系の分野がありましたが、2009年3月を最後に分野名としての「内分泌」は途絶えていました。このたびあらためて内分泌代謝分野を立ち上げてスタートを切らせていただく機会をいただき、身の引き締まる思いです。また今回の着任にあたり多くの先生方・先輩方よりお祝い・激励のメッセージをいただき心より感謝申し上げます。内分泌代謝学の発展に貢献すべく研究室を運営することはもとより、名古屋大学・医学研究科・環境医学研究所の発展に尽力していきたいと考えておりますので、広くご指導ご支援ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

内分泌代謝学 林良敬先生 教授インタビュー

——教授に就任されたご感想や抱負をお聞かせください

大変だなという気持ちが正直なところ。環境医学研究所は8つの研究分野と2つのセンターからなる比較的小さな研究所ですので、その一端を担う重みを感じています。しかし小さいということは研究所メンバーの顔が見えやすいというメリットでもありますから、研究所内の有機的な連携を強めるように、そして環境医学研究所を盛り上げるように貢献していきたいと思っています。もちろん、鶴舞キャンパスの先生方とも共同研究などを通して連携して、名古屋大学医学研究科・医学部全体の発展につながるように頑張りたいと考えています。

——今の道に進まれたきっかけ

二年間の臨床研修で色々な科、特に内科の色々な領域を回る過程で、内分泌学の論理的であるところに興味を引かれるようになりました。当時は分子生物学的手法によりホルモンの作用機構の分子メカニズムが次々と明らかとされつつあり、自分もそのような研究をやってみたいという気持ちがあったので、卒業三年目には環境医学研究所の大学院に進みました。色々な先生方との出会いを通して、内分泌学を軸としつつ多様な研究をしてきたのですが、徐々に、稀な遺伝性疾患よりも糖尿病のような“ありふれた疾患”の新しい治療法の開発に結びつくような研究がしたいという気持ちが強くなって現在の研究をしています。

——内分泌代謝学の魅力についてお聞かせください

内分泌学の魅力としては、一つ目は非常に論理性がある学問であるということです。二つ目は、非常に微量な物質が全身に作用して大きな影響を与えるという点でダイナミックな分野であるということです。三つ目は、それまでわかりきったことだと考えられてきたことについて研究によってそのものの全く異なる側面が見えてくる点です。新しいホルモンの発見や新しいホルモン作用が明らかになることによって、それまで見えていなかったものが急に見えるようになる。謎であったものが非常にロジカルに、エレガントに解き明かされるということは内分泌学の歴史の過程ではしばしばあったように思います。私は、現在、いわば“古い”ホルモンであるグルカゴン研究の軸としていますが、血糖上昇ホルモンとして教科書に明記されているグルカゴンは実はアミノ酸代謝制御において不可欠の役割を果たしていることわかり、少しみえる景色が変わってきたように感じています。これからは、グルカゴンによるアミノ酸代謝制御が、糖尿病の病態とどのように絡み合っているか、その謎を解き明かしていきたいと考えています。

——最後に学生へのメッセージ

インターネットやSNSによって医学生同士の情報交換や情報の入手が簡単になっていると思います。でも、学生のうちは他学部との学生とも交流して多様な経験をすることが大切だと思います。卒業後は、主に医師をはじめとする医療関係者と毎日やというほど関るわけですから、学生のうちこそ、たくさんの人との出会いを大切に楽しんでください。

◆ 第110回 名古屋大学医学部 学友大会のご案内 ◆

秋暑の候、皆様にはお変わりもなくご活躍のことと存じ、心よりお慶び申し上げます。

さて、今年度の学友大会委員長を仰せつかり、只今多くの先生方と協議、準備を進めております。今回も多数の会員のご参加を得て、盛大な会にさせて頂きたいと念じております。

どうぞ万障お繰り合わせの上ご参加頂きますようお願い致します。

令和元年8月

第110回名古屋大学医学部学友大会 委員長 石黒直樹

とき

令和元年10月12日(土曜日)14時～

ところ

名古屋観光ホテル 3階那古の間
〒460-8608 名古屋市中区錦一丁目19番30号
TEL 052-231-7711

行事

1. 総会
2. 記念講演
◎演題：「アカデミアからの医療イノベーションの推進とPMDAによるレギュラトリーサイエンス支援」
◎演者：近藤 達也 先生
(独立行政法人医薬品医療機器総合機構
PMDA 名誉理事長)
3. 懇親会 3階 那古の間東

【一筆啓上欄】

大会誌に設けておりますので会員相互の紙上交歓と共にこの企画へ、関連病院、支部、クラス会、医局よりご賛同を賜りますようお願い申し上げます。

事務局：第110回名古屋大学医学部学友大会 TEL 052-744-2512(直通)

細胞情報統合解析部門システム生物学分野

しまむら 島村 徹平 先生 教授就任

〈経歴〉

- 平成19年3月 北海道大学大学院情報科学研究科複合情報学専攻博士後期課程修了博士（情報科学）取得
- 平成19年4月 東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センターDNA情報解析分野 特任研究員
- 平成22年4月 東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センターDNA情報解析分野 特任助教
- 平成23年8月 東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センターDNA情報解析分野 助教
- 平成26年4月 名古屋大学大学院医学系研究科システム生物学分野 特任准教授
名古屋大学 博士課程教育リーディングプログラム 実世界データ循環学リーダー人材養成プログラム 特任准教授（兼任）
- 令和元年6月 名古屋大学大学院医学系研究科システム生物学分野 教授

〈業績〉

1. Kawakubo H, Matsui Y, Kushima I, Ozaki N, Shimamura T. A Network of Networks Approach for Modeling Interconnected Brain Tissue-Specific Networks, *Bioinformatics*, in press.
2. Kajino T, Shimamura T, et al. Divergent lncRNA MYMLR regulates MYC by eliciting DNA looping and promoter-enhancer interaction, *EMBO J*, e98441, 2019.
3. Abe K, Hirayama M, Ohno K, Shimamura T. ENIGMA: an enterotype-like unigram mixture model for microbial association analysis, *BMC Genomics*, 20(Suppl 2):191, 2019.
4. Matsui Y, et al. and Shimamura T. phyC: Clustering cancer evolutionary trees, *PLoS Comput Biol*, 13(5):e1005509, 2017.
5. Kataoka K, Nagata Y, Kitanaka A, Shiraiishi Y, Shimamura T, et al. Integrated molecular analysis of adult T cell leukemia/lymphoma, *Nat Genet*, 47(11):1304-15, 2015.

この度、2019年6月1日付けで、システム生物学分野教授を拝命いたしました。この場をお借りして、学友会の皆様にご挨拶申し上げます。

私の専門領域はデータサイエンスです。この研究分野は測定・情報技術、生命医科学、数理科学の異分野が融合した研究分野になります。現在この分野において、データを活用した生命医科学における諸問題を解決するためのデータ駆動型の数理モデリングに関する研究を行っています。そもそも私が医学と数理科学の融合研究を志すきっかけは、大学学部時代の2000年まで遡ります。複雑な生命

現象や疾患の根本にあるシンプルな原理を炙り出すことのできるデータサイエンスに魅力と可能性を感じた私は、北海道大学大学院情報科学研究科教授の水田正弘先生の下でデータ解析の土台となる統計科学を学びました。2007年に北海道大学大学院情報科学研究科複合情報学専攻にて博士課程を修了した後、東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター教授の宮野 悟先生の研究室に移り、がんを対象に、次世代シーケンサーや質量分析器から得られるさまざまなオミクス情報を統合解析するためのシステム生物学的方法論に関する研究を行いました。2014年からは、名古屋大学大学院医学系研究科前教授（現 愛知県がんセンター総長）の高橋 隆先生にご縁をいただき、名古屋大学大学院医学系研究科システム生物学分野に分野長として着任し、がん、神経疾患、精神疾患、希少疾患を対象に、最先端のデータサイエンスを基軸に、膨大な生命情報を読み解くための数多くの数理モデルや情報解析技術を開発し、生命現象や疾病の理解に資する医学研究を行っています。現在、人工知能（AI）をはじめとして著しい発展を見せるデータサイエンスは、今やすべての分野に大きな影響を与える領域であり、医学や生物学においてもブレイクスルーをもたらすには、避けては通れない分野となっています。

近年、生命医科学分野における計測技術の革新は急速に進んでいます。この技術革新によって、従来の病歴や診断、投薬、生検検査などの情報に加えて、個人のゲノムや遺伝子発現などの分子情報、CTやMRIなどの画像情報、ウェアラブルデバイスを使った日常活動の記録など、さまざまな生命情報が取得できるようになりました。これは、生命情報のデジタル化が進み、コンピュータを用いて生物の振る舞いをデータとして扱える量が膨大になったというように捉えることができます。こうした医学分野における膨大なデータの活用の先には、さまざまな臨床的応用の可能性や期待があります。例えば、超早期疾患マーカーの開発、薬効や疾病再発の高精度予測、革新的な分子標的薬の発見、薬剤耐性機構の解明・克服などです。しかしながら、現実と期待の間には大きなギャップがあり、目標の実現のためには、ペタバイト級の膨大で複雑なデータがもつ不確実性を考慮しつつ、情報をまとめ、分析し、的確に結果を解釈するための技術を開発するとともに、医学と数理科学の両方の言語を理解し、両分野の架け橋となる人材を育成する必要があります。そのため、本学において、数理科学と医学の融合から、生命の複雑さにまつわる法則性を発見する情報解析基盤を確立するとともに、融合研究による医療イノベーションを引き起こす解析研究・教育拠点を創生することが今後の目標です。本学には数学的素養を持つ学生も多く、彼らの才能を伸ばしながら、データサイエンスリテラシーをもつ研究医や臨床医の育成に貢献していきたいと思っております。皆様には、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

先端応用医学講座システム生物学分野 島村徹平先生 教授インタビュー

— 教授に就任されたご感想や抱負をお聞かせください

21世紀における医学の重要な課題は、広い意味で複雑系の問題として捉えることができます。複雑な問題の根本にあるシンプルな原理を数理の言葉で炙り出すことで、生命医学分野のイノベーションの惹起に繋げる研究に邁進したいです。また、今後は、医学と数理科学の架け橋として貢献し、基礎医学研究や医療現場におけるデータを適切に解析できる人材を育てていきたいと思っています。

— 今の道に進まれたきっかけをお聞かせください

学部時代に、ヒトゲノム配列が解読され、データ解析の重要性を感じたこと、またデータを基に仮説を構築するデータ駆動型アプローチの威力とポテンシャルに感銘を受けたのがきっかけです。元々プログラミングや数学が好きで、細胞が織り成す複雑な生命現象や疾患をコンピュータで読み解きたいという関心が強かったというのがあります。

— システム生物学の魅力について教えてください

全く知られていない病気のメカニズムや生命の新しい発見がデータを通してわかることです。とても複雑な生命現象のダイナミクスが、数理モデルを用いてシンプルな原理で説明できたときには、大変な達成感と喜びを感じることができます。

— 最後に学生へのメッセージをお願いします

とにかく何でもやってみて、色々な経験をするのがとても重要です。一見するとその瞬間においては関係のないように見える『点』と『点』もあとで『線』となって繋がることが世の中には多々あります。何事もチャレンジしてみるとということには大きな意味があると思います。また、学生の間になんか夢中になり、のめりこむ体験を経験してほしいです。自分が楽しいと思える、好きで始めた物事への没頭体験が、人をより高く、刺激に満ちた世界へと連れて行ってくれます。是非やりたいことに『ハマる』体験を実践して、飛び抜けた突破を果たしてみてください。

クラス会だより

珊瑚会 (昭和35年卒)

こうさか
高阪

あきら
彰

私たちは昭和35年卒業のクラス会です。卒後60年を目前にして、今年3月9日(土)名古屋マリオートアソシアホテルにて36回目となるクラス会を開催しました。卒業時84名(男80名、女4名)の会員も、現在は49名(男48名、女1名)に減って居ります。クラス会開催の記録を調べてみると、第1回から第3回までは不明ですが、4回目以降の記録はすべて残っています。昭和の時代は数年に1回の割合で計6回、平成に入ってから毎年1回で30回、今回が通算36回目の開催となりました。昭和の時代のクラス会は卒業時クラス委員だった萩原啓二君(故人)がそのままボランティアでクラス会幹事を引き受けてくれ、大変助かりました。平成に入り、卒後30年、ぼつぼつ昔を懐かしむ年令になって来たこともあり、会を円滑に持続させるための方策が模索され、議論の結果、旧ポリクリグループが交代で責任を持って会を開くということになり、代表幹事は続投で順調に運用されて行きましたが、平成13年3月に18回目のクラス会が開かれた後、萩原君が突然の病でその年の10月に急逝され、驚きと悲しみとともに、一同途方に暮れました。しかし、クラス会を続けて行こうとの総意により、紆余曲折はありましたが、次期幹事として私が選ばれ、平成14年の第19回から本年まで通算36回目のクラス会を開く事が出来ました。出席者数は平成24年までは大体40人台で推移しましたが、平成24年には1年間だ



けで7名もの会員が死去したため、その後数年は30人台、平成29年からは20人台へと減少し、今年は24名の出席となりました。女性会員は4名中3名が早くに死亡し、残る1名も病床にあります。会員の住居分布は静岡を含む東海4県が主ですが、北海道、関東、近畿、山陰などに分布して居ります。今回のクラス会では東海4県以外では北海道から児玉昌彦君、東京から廣瀬和彦君、吉川敏君らの出席がありました。児玉君のクラス会への出席率は抜群で、十数回連続の全出席です。

会員全員が満83才以上となった現在、五体大満足とは行きませんが、出席した会員の多くは、それぞれの立場で、今なお地域医療に貢献し、また様々な社会活動に取り組んで居られることを知り、大変心強く感じました。新しい元号を迎え、来年以降も、可能な限りクラス会を続けて行けることを祈念して散会となりました。

学友会評議会 開催

7月6日(土)医学部鶴友会館2階大会議室において、令和元年学友会評議会が22名の出席と61名の委任状を得て開催されました。はじめに、名古屋支部の小池斌碩先生が開会の辞を述べられ、長坂智子先生が議長、勝野雅央時報部長が副議長に選出されました。続いて、学友会会長の門松健治研究科長、学友会副会長の小寺泰弘病院長のご挨拶され、抱負を述べられました。次に、この一年間にご逝去された38名の会員に対して黙祷が捧げられました。謹んでご冥福をお祈りいたします。その後、新しく評議員になられた、名古屋支部の渡邊源市先生(S62卒)、東濃支部の近藤泰三先生(S55卒)、病態内科学講座 消化器内科学教授の藤城光弘先生(東大H7卒)、総合管理医学講座 総合医学教育学教授の錦織宏先生(H10卒)、環境医学研究所内分泌代謝分野教授の林良敬先生(S62卒)、細胞情報統合解析部門システム生物学教授の島村徹平先生(北大H19卒)が紹介され、新評議員として渡邊源市先生、近藤泰三先生がご挨拶されました。続いて議事に入りました。ご欠席された庶務部長の尾崎紀夫先生に代わり会計部長の大野欽司先生より会務報告が行われ、平成30年度の第109回学友大会について報告されました。また今年度の第110回学友大会について、運動・形態外科学講座 整形外科学教授である石黒直樹先生を大会委員長とし、令和元年10月12日(土)名古屋観光ホテル3階那古の間にて開催されることが報告されました。記念講演として、独立行政法人医薬品医療機器総合機構PMDA名誉理事長である近藤達也先生による「アカデミアからの医療イノベーションの推進とPMDAによるレギュラトリーサイエンス支援」

が行われることが述べられました。昨年度の支部総会については、6支部で開催され、延べ9名の教授が出席されたことが報告されました。次に、会計部長の大野欽司先生から平成30年度の収支決算を報告され、監事の浜島信之先生により監査が報告されました。平成31年度の予算についても承認されました。名誉会員には退職された4名の教授、青山温子先生(国際保健医療学・公衆衛生学)、高橋隆先生(分子腫瘍学)、藤本豊士先生(分子細胞学)、小川豊昭先生(総合保健体育科学センター精神健康医学)、そして支部長歴10年(70歳以上)の3名、高窪義昭先生(埼玉支部)、小笠原文雄先生(岐阜支部)、竹村恵史先生(奈良県支部)、さらに大会委員長歴(70歳以上)の1名、宮田完志先生(第105回学友大会委員長)が推薦され、承認されました。その後、学友会会長の門松健治先生より、名古屋大学医学部創基150周年医学部基盤整備支援事業についてのお話があり、具体的には名古屋大学医学部150年史、名古屋大学医学部ネクタイ・スカーフ、名古屋大学医学部キャンパスアイデンティティー、名古屋大学医学部創基150周年記念基金について議論を深められていらっしゃいました。最後に勝野雅央先生に代わり大野欽司先生が閉会の辞を述べられ、本年度の評議会は終了しました。その後レストラン鶴友においての親睦会では、和やかな様子で親睦を深められていらっしゃいました。

(文責：高見 音宇)



准教授就任

運動・形態外科学講座整形外科学 准教授

いまがま しろう
今釜 史郎

〈経歴〉

平成9年3月 名古屋大学医学部卒業
 平成9年4月 豊橋市民病院 整形外科研修医
 平成11年7月 豊橋市民病院 整形外科医師
 平成13年12月 名城病院 整形外科脊椎脊髄センター
 平成17年4月 名古屋大学大学院 整形外科学入学
 平成19年7月 名古屋大学医学部附属病院 整形外科医員
 平成21年3月 名古屋大学大学院 整形外科学修了(医学博士)
 平成21年12月 名古屋大学医学部附属病院 整形外科助教
 平成22年8月 University of California, Davis, Department of Orthopaedic Surgery, Research fellow
 平成25年7月 名古屋大学医学部附属病院 整形外科講師
 令和元年5月 名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学専攻 運動・形態外科学講座整形外科学准教授

〈業績〉

1. Imagama S, Ando K, Kobayashi K, Seki T, Hamada T, et al. The relationship between neuropathic pain and spinal alignment: independent risk factors for low quality of life in middle-aged and elderly people. Spine. 2019 [Epub ahead of print]
2. Imagama S, Ando K, Kobayashi K, Seki T, Hamada T, et al. Impact of comorbidity rates of lumbar spondylosis, knee osteoarthritis, and osteoporosis on physical QOL and risk factors for poor physical QOL in middle-aged and elderly people. Mod Rheumatol. 29:1-8, 2019.
3. Imagama S, Ando K, Takeuchi K, Kato S, Murakami H, et al. Perioperative Complications After Surgery for Thoracic Ossification of Posterior Longitudinal Ligament: A Nationwide Multicenter Prospective Study. Spine. 1;43(23):E1389-E1397, 2018.
4. Imagama S, Ando K, Ito Z, Kobayashi K, Hida T, et al. Risk Factors for Ineffectiveness of Posterior Decompression and Dekyphotic Corrective Fusion with Instrumentation for Beak-Type Thoracic Ossification of the Posterior Longitudinal Ligament: A Single Institute Study. Neurosurgery. 1;80(5):800-808, 2017.
5. Imagama S, Ito Z, Ando K, Kobayashi K, Hida T, et al. Optimal Timing of Surgery for Intramedullary Cavernous Hemangioma of the Spinal Cord in Relation to Preoperative Motor Paresis, Disease Duration, and Tumor Volume and Location. Global Spine J. 7(3):246-253, 2017.

学友会の皆様におかれましては、ご清栄のこととお慶び申し上げます。このたび令和元年5月1日付けで名古屋大学大学院医学系研究科整形外科学の准教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成9年に名古屋大学医学部を卒業後、豊橋市民病院赴

任、平成10年に名古屋大学整形外科(岩田久名誉教授)に入局し、同病院にて横田慎太郎先生、井上五郎先生、大石幸由先生のご指導の下、3次救命救急と整形外科医療に従事しました。ヘリコプターで搬送される重症患者さんも含め、たくさんの多発外傷や救命救急医療を経験し、整形外科の各専門をお持ちの先生方にも恵まれ、四肢関節、関節リウマチ、手の外科、小児整形、脊椎の高度な医療を研修することができました。約4年半が過ぎた頃、当時の医局長であった松山幸弘先生(浜松医科大学教授)に赴任を命ぜられた名城病院は、手術症例の多くが脊柱変形の脊椎脊髄センターであり、整形外科部長の川上紀明先生をはじめ、松原祐二先生(刈谷豊田総合病院副院長)、金村徳相先生(江南厚生病院副院長)にご指導いただき、朝から夜中まで脊椎脊髄手術の毎日でした。多数の一般脊椎脊髄手術とともに、呼吸器外科や血管外科との合同手術や術後集中治療室管理を要する重症例の経験も、現在携わっている難治性疾患の治療に役立っています。平成17年には名古屋大学大学院医学系研究科に入学し、石黒直樹先生(名古屋大学整形外科教授)と門松健治先生(名古屋大学分子生物学教授)のもとで、プロテオグリカンと脊髄再生の研究テーマをいただき、平成18年から本格的な基礎研究を開始しました。平成19年から名古屋大学整形外科医員を兼任し、臨床と基礎研究の両立は大変でしたが、臨床、基礎研究室両方の視点から医療の限界を見つめ発展を目指す立場は、現在のやりがいある大学病院の仕事につながっています。大学院を卒業した年の12月に脊椎椎体チーフの松山幸弘先生が浜松医科大学教授として赴任なさったため、名古屋大学整形外科助教と脊椎椎体チーフを拝命することになりました。翌年からは毎年新しいことに挑戦する機会を石黒直樹先生からいただき、米国留学、帰国後は医局長や病院機能推進本部(病院機能評価)臨床グループのリーダーをはじめ、厚労省の全国多施設研究や学会委員会の委員長、PMDA 専門委員などをさせていただいており、果たすべき責任とやりがいを、日々感じることができ感謝しています。

名古屋大学整形外科で行う難治性脊椎脊髄疾患の手術は、近年の医療技術の向上と術中脊髄モニタリング、術中ナビゲーションシステムなど医療機器の進歩により、良好な手術成績が得られるようになりましたが、未解決の問題もあります。名古屋大学整形外科には全国に誇る多数の関連病院があり、平成18年に私たちは関連病院と共に脊椎脊髄疾患に関する多施設研究グループ(Nagoya Spine Group [NSG])を立ち上げました(初代理事長:加藤文彦先生[中部ろうさい病院 院長])。多施設研究を全国・国際学会、英語論文で発信し、若手医師育成や市民公開講座など教育的事業も行っています。また長谷川幸治先生(関西福祉科学大学教授)ご指導の下、一般中高齢者の疫学研究も継続しています。日本は超高齢社会を迎え健康寿命延伸が求められる中、整形外科医療の果たすべき役割は大きくなっています。これまで多くの先生方にいただきました温かいご指導に感謝申し上げますとともに、今後も名古屋大学の強力な連携力をもとに基礎と臨床の両面から国内外に誇れる研究や治療を進め、教育にも貢献したいと存じます。学友会の皆様には引き続きご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

准教授就任

先端医療開発部 先端医療・臨床研究支援センター

しみず
清水 しのぶ
忍

〈経歴〉

平成11年3月	東京理科大学薬学部薬学科 卒業
平成13年3月	東京理科大学大学院薬学研究科薬学専攻修士課程 修了
平成16年3月	名古屋市立大学大学院薬学研究科医療機能薬学専攻博士後期課程満期退学
平成16年4月	名古屋市立大学大学院薬学研究科 研究員
平成17年3月	学位取得(博士(薬学))
平成17年8月	医薬品医療機器総合機構新薬審査第三部審査専門員
平成18年1月	医薬品医療機器総合機構新薬審査第一部審査専門員
平成23年4月	名古屋大学医学部附属病院先端医療・臨床研究支援センター
平成25年1月	名古屋大学医学部附属病院先端医療・臨床研究支援センター 病院講師
平成30年7月	名古屋大学医学部附属病院先端医療開発部先端医療・臨床研究支援センター 病院講師
令和元年5月	名古屋大学医学部附属病院先端医療開発部先端医療・臨床研究支援センター 准教授

〈業績〉

1. Shimizu S, Tsuchiya S, Hirakawa A, Kato K, Ando M, et al. Design of a Randomized Controlled Clinical Study of tissue-engineered osteogenic materials using bone marrow-derived mesenchymal cells for Maxillomandibular bone defects in Japan: the TEOM study protocol. BMC Oral Health. 19(1): 69, 2019
2. Gotoh M, Yamamoto T, Shimizu S, Matsukawa Y, Kato M, et al. Long-term efficacy and safety of regenerative treatment for male stress urinary incontinence using autologous adipose-derived regenerative cells. Int J Urol. 26(3): 400-405, 2019
3. Shimizu S, Yamamoto T, Nakayama S, Hirakawa A, Kuwatsuka Y, et al. Design of a single-arm clinical trial of regenerative therapy by periurethral injection of adipose-derived regenerative cells for male stress urinary incontinence in Japan: the ADRESU study protocol. BMC Urol. 17: 89, 2017.
4. Yoneda S, Asada R, Shimizu S, Ono S, Yamaguchi T. What Factors Lead to prolonged Regulatory Review Times for New Drugs in Japan? J Clin Trials. 5(6): 247, 2015.
5. Asada R, Shimizu S, Ono S, Ito T, Shimizu A, et al. Analysis of development and submission strategies for new drugs in Japan whose clinical development was hampered. J Clin Pharm Ther. 38(4): 309-313, 2013

学友会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶

び申し上げます。この度、令和元年5月1日付をもちまして名古屋大学医学部附属病院先端医療開発部先端医療・臨床研究支援センターの准教授を拝命致しました。ここに謹んでご挨拶を申し上げます。

私は、平成11年に東京理科大学薬学部を卒業、平成13年に東京理科大学大学院薬学研究科を修了後、名古屋市立大学で学位を取得しました。いずれも小野秀樹先生(名古屋市立大学名誉教授)にご指導賜り、動物を用いた中枢神経薬理のうち、主に脊髄反射に係る薬物の効果を研究し、平成17年3月に博士号を取得することができました。その後、平成17年8月から医薬品医療機器総合機構(PMDA)において新医薬品の審査業務を、初めは第3分野(中枢・末梢神経系用薬、麻酔用薬、感覚器官用薬、麻薬)の薬理担当として、その後、第1分野(消化器官用薬、外用薬、免疫抑制剤、その他)に移り、薬理担当だけではなく、副主任・主任と審査チームを纏める役割を担い、新薬審査・対面助言・初回治験届出調査等の業務を行っておりました。数多くの医薬品の審査業務を経験したことで、自らも医薬品等の実用化開発に携わりたいと思い、平成23年4月より名古屋大学医学部附属病院先端医療・臨床研究支援センターに入職致しました。

平成24年に医療イノベーション5か年戦略が策定され、革新的な医薬品等の研究、開発、実用化に係る様々な政策が進められてきました。名古屋大学は、平成24年に文部科学省の「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」と厚生労働省の「臨床研究中核病院整備事業」に採択され、基礎からのトランスレーショナルリサーチ及び臨床試験の推進のための体制整備や産学官連携の強化を図ってきました。また、閣議決定した「日本再興戦略」及び関係関係申合せによる「健康・医療戦略」に基づき、健康・医療戦略推進本部が設置され、平成27年4月に日本医療研究開発機構(AMED)が設立され、アカデミアでも実用化を目指した開発研究の推進が求められています。橋渡し研究の拠点で、かつ医療法上の臨床研究中核病院でもある名古屋大学医学部附属病院には、実用化シーズの育成に大きな期待が寄せられています。

松尾清一前病院長(現総長)、石黒直樹前病院長、小寺泰弘病院長をはじめとし、安藤雄一先端医療開発部長、水野正明先端医療・臨床研究支援センター長、安藤昌彦データセンター長のご指導・ご支援により、名古屋大学医学部附属病院での実施体制が構築され、これまでも複数の医師主導治験、先進医療B、再生医療の臨床試験の立ちあげ・実施を、名古屋大学を中心とした各先生方と行って参りました。シーズの育成を共に実施していただいた先生方に、改めて感謝申し上げます。これからも、PMDAでの審査経験を生かし、名古屋大学発の実用化シーズの育成に貢献し、社会へ還元して参りたいと考えています。実用化開発は早期の段階からTarget Product Profileを見据えながら、開発戦略を練る必要がありますので、できるだけ早めにご相談頂き、実用化を協同して進めていきたいと考えています。学友会の皆様におかれましては、今後とも、どうぞご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

北里研究所 浅川賞受賞にあたって

分子病原細菌学分野 あらかわ よしちか
荒川 宜親

細菌学の研究分野で顕著な実績を挙げた者に対して北里研究所より授与される浅川賞を、この度、日本細菌学会を通じて受賞させて頂きましたので、学友会会員および同門関係者の皆様にご報告申し上げます。

北里柴三郎は優秀な門下生であった浅川範彦が42歳で逝去したことを

惜しみ、1909年に浅川の功績（腸チフス診断薬および丹毒治療薬の創製等）を永く讃え後世に伝えるために浅川賞を創設しました。第1回浅川賞は北島多一（当時、国立伝染病研究所部長等を兼務、後に北里が設立した慶應義塾大学医学科の教授、同医学部長、北里研究所長、文化功労者）が「ハブ蛇毒の研究およびその血清療法に就いて」という当時、最先端の研究実績により受賞しました。その後、1934年には最初の梅毒治療薬となったサルバルサンの発見に大きく貢献した秦佐八郎らが受賞し、第二次世界大戦の影響で1944～1947年の間は一時中断されたものの、1961年には細菌での薬剤耐性の菌株間伝達現象を発見した秋葉朝一郎と落合國太郎が、1965年には世界で最初に腸炎ビブリオを発見した藤野恒三郎が受賞するなど、浅川賞は今日まで110年に亘り継続されてきた国内で最も歴史と伝統を誇る医学関係の功労賞です。

今回、私の受賞題目は「新型多剤耐性菌の克服に資する体系的研究」であり、その一連の研究の開始は1980年代に遡ります。大学院時代には遺伝子組み換え実験等の手技をほぼ独学で習得しつつ、当時の加藤延夫教授、太田美智男助教授のご指導の下に肺炎桿菌 (*Klebsiella pneumoniae*) 等の染色体性 β -ラクタマーゼ遺伝子のクローニングと解析を世界に先駆けて実施し学位論文としました。DNAの塩基配列の解析は自作の8ビットPCとマシン語で組んだ解析プログラムを用いて行いました。その後、名古屋大学細菌学の助手～助教授時代の1996年6月までは、セファマイシンを分解するプラスミド媒介性のMOX-1型 β -ラクタマーゼを産生する肺炎桿菌と共に、現在国際的に深刻な問題となっているカルバペネム耐性腸内細菌科細菌 (CRE) の草分けであるIMP-1型メタロ- β -ラクタマーゼ (MBL) 産生 *Serratia marcescens* の解析を行いました。その後1996年7月に国立予防衛生研究所（現国立感染症研究

所）に41歳で部長として異動した後は全国の共同研究者の方々の支援を得て、様々な新規の薬剤耐性機構を分子・遺伝子レベルで解明してきました。例えば、各種の細菌が産生する β -ラクタマーゼに高い安定性を示すセファマイシンを効率よく分解するプラスミド媒介性のCMY-9、CMY-19などの各種の新型クラスC β -ラクタマーゼとともにSHV-24、TEM-91、GES-4、CTX-M-64、TLA-3などの各種のプラスミド媒介性の新型クラスA β -ラクタマーゼの解析にも携わりました。上記と共に、広範囲のアミノ配糖体に超高度耐性を付与するプラスミド媒介性の16S rRNAメチル転移酵素 (RmtA、RmtB、RmtC、NpmA)、さらにプラスミド媒介性のフルオロキノロン排出ポンプ (QepA) やホスホマイシン不活化酵素 (FosA3) などの研究にも従事しました。一方、新生児髄膜炎等の起因菌である *Streptococcus agalactiae* (B群連鎖球菌: GBS) におけるペニシリン低感受性機構の解析も実施しました。同時にMBL産生株の簡便検出法 (SMA disk法: 栄研化学より市販) や *Acinetobacter* 属の簡便遺伝子型別試験法 (POT法: 関東化学より市販) などを開発してきました。

2011年4月に15年ぶりに母校に戻り新型多剤耐性菌に有効な新規化合物等の開発研究と後継者の育成のために尽力して参りましたが、今回の受賞を契機に新しい課題に挑戦したいと考えておりますので、引き続き皆様のご指導とご鞭撻を賜ることができましたら幸甚に存じます。

なお、上記の一連の研究は、本学関係者としては、八木哲也 (臨床感染統御学教授)、柴山恵吾 (国立感染症研部長)、土井洋平 (藤田医科大学教授)、木村幸司 (細菌学准教授)、和知野純一 (細菌学講師)、川村久美子 (保健学科准教授)、堀井俊伸 (浜松医科大教授) らの協力により実施されたものであり、この場をお借りして深謝致します。
(敬称略)



人事トピックス

藤田医科大学 医学部脳神経内科学 主任教授

わたなべ ひろひさ
渡辺 宏久

〈経歴〉

- 平成5年3月 三重大学医学部卒業
 平成5年3月 名古屋第二赤十字病院
 平成11年4月 名古屋大学大学院医学研究科大学院
 平成18年5月 同助手
 平成21年1月 同講師
 平成25年6月 名古屋大学医学系研究科脳とこころの研究センター特任教授
 平成25年12月 名古屋大学脳とこころの研究センター特任教授
 平成31年4月 藤田医科大学医学部 脳神経内科学 主任教授

〈論文〉

1. Hirohisa Watanabe, Toshiaki Ieda, Taiji Katayama, Akinobu Takeda, Ikuko Aiba, Manabu Doyu, Masaaki Hirayama, Gen Sobue, Cardiac 123I-meta-iodobenzylguanidine (MIBG) uptake in dementia with Lewy bodies: Comparison with Alzheimer's disease, J Neurol Neurosurg Psychiatry, Vol. 70, No. 6, 781-873, 2001
2. Hirohisa Watanabe, Yufuko Saito, Shinichi Terao, Tetsuo Ando, Teruhiko Kachi, Eiichiro Mukai, Ikuko Aiba, Yuji Abe, Akiko Tamakoshi, Manabu Doyu, Masaaki Hirayama, Gen Sobue, Progression and prognosis in multiple system atrophy: an analysis of 230 Japanese patients., Brain, Vol. 125, No. 5, 1070-1083, 2002
3. Hirohisa Watanabe, Hiroshi Fukatsu, Nozomi Hishikawa, Yoshio Hashizume, Gen Sobue, Field strengths and sequences influence putaminal MRI findings in multiple system atrophy, Neurology, Vol. 62, No. 4, 671-671, 2004,

この度、平成31年4月1日付けで、藤田医科大学医学部脳神経内科学主任教授を拝命しました。学友会の皆様に紙面をお借りしてご挨拶を申し上げます。

私は、平成5年に三重大学医学部を卒業後、初期研修から6年間を名古屋第二赤十字病院で過ごしました。三重大では葛原茂樹先生に、第二日赤では多くの素晴らしい先輩に出会ったことがきっかけで神経内科を選びました。我が家は祖父茂夫が脳外科、父久雄が精神科で、三代続けて神経系の道を進んだことに縁を感じています。同病院では、先端的血管内治療を含めた脳卒中診療に明け暮れ、神経学の基礎を叩き込んで頂きました。一方、神経難病の患者さんから質問を頂いても明快な答えが無かった“自然歴”を解

明したい、臨床診断と病理診断が異なる例が多い問題を解決するため正確な診断に資する画像指標を作りたいと思ったことが、その後の研究基盤である点でも大きな経験をさせて頂いたと感謝しています。

名大神経内科学大学院在学中には、祖父江元先生はじめ多くの先生のご指導の下、業績に記した複数の論文を作成出来ました。当時の研究成果が海外の教科書に採用され、多くの引用を頂いているのは望外の喜びです。その後は、臨床班チーフとして、多くの診療科と共同してパーキンソン病や多系統萎縮症など神経変性疾患の自然歴研究や画像研究を軸とする臨床研究を進めました。途中3年8ヶ月は医局長を務め、日本神経学会学術大会（大会長祖父江元）の運営にも携わりました。皆で考えた教育企画、市民企画、メディカルスタッフ企画などは今も学術大会で引き継がれており、苦しかったですが、良い思い出となっています。平成25年6月からは脳とこころの研究センター特任教授を拝命し、国内外の先端研究者や施設と共同で、加齢と認知症の脳内神経回路研究に従事しました。同時に新学術領域研究（代表祖父江元）、革新脳、融合脳研究にも関与し、国内外の一流研究者と異分野融合型、得意領域融合型研究を進めることが出来ました。現在、AMED関連研究の主任研究者として進めている、“声で認知症が推定出来るAIシステム”や“認知症の画像診断システム”開発でも良い結果が得られつつあります。センターにおける6年で、多くの仲間が出来、皆で世界的な高齢者大規模画像・ゲノム・オミックスコホートを構築し、加齢に伴う脳萎縮様式の実態を解明してマスコミに取り上げられ、ビッグデータ、AI、IoTなどに親しみ、様々な国際交流の場に参加したことなどは、今後の研究推進に大いに役立つ経験であると心から感謝している次第です。

今回着任した藤田医科大学は、日本一の病床数を誇る大学病院を敷地内に有し、医学部・医療科学部を併設する医療系総合大学です。3つの教育病院で幅広い医療を学べ、さらに2020年には岡崎市でも開院を予定するなど、非常に活気のある職場です。着任して3ヶ月、患者さんや病気に立ち向かう医師とスタッフの気概や、病院の皆様の温かさを日々経験し、大変感激しています。今後は、ネットワーク、フットワーク、チームワークを合い言葉として、名大における経験や人脈を大切に、武藤多津郎前教授の育てた素晴らしいメンバーとともに、診療、教育、研究の向上に邁進し、外から見える、構成員が誇りを持てる、多くのヒトが集う、ワクワクする医局を作りたいと思っています。また、同門の勝野雅央教授、道勇学愛知医大教授とも連携し、この地域を盛り上げたいと願っています。引き続きのご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。